森林鉄道から日本一のゆずロードへ

—ゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化—

構成文化財ガイドブック

日本遺産

ゆずとりんてつ

奈半利町・田野町・安田町・北川村・馬路村

中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会

中芸のゆずと森林鉄道日本遺産ストーリー

高知市内から東に約50キロに位置する中芸地域。日本三大杉美林の一つに数えられる杉林が広がる急峻な四国山脈の山並み。そこから流れる安田川と奈半利川の二本の清流には、日本一の天然鮎が泳ぐ。河口には、雄大な土佐湾を背景に、土佐漆喰や水切瓦、「いしぐろ（石塀）が用いられた屋敷や酒蔵が建ちならぶ町並みが広がる。この中芸の地を、爽やかな香りで包み、目に鮮やかに彩るのが「ゆず」である。

日本三大杉美林と魚梁瀬（やなせ）森林鉄道

中芸は、かつては林業で栄え、大木を伐る掛声が響く地であった。古くは弘法大師の時代から伐り出され、豊臣秀吉が洛陽東山佛光寺の大仏殿の建材に用いた銘木・魚梁瀬杉をはじめ、多くの木材を産出し、安田川・奈半利川に流して河口へ、そして海から日本全国へと送り出してきた。

明治末から敷設がはじまり、隧道や橋梁により中芸一帯を環状に繋いだ魚梁瀬森林鉄道、通称「りんてつ」は、木材の搬出だけでなく、トロッコで学校に通い、トロッコでお嫁入りなど人の暮らしを繋ぎ交流を生んだ。原生的杉林景観の残る千本山、材木業や回船業で名を馳せた豪商の屋敷が軒を連ねる町並みとともに中芸にちりばめられた18ヶ所におよぶ「りんてつ」の遺構群は、林業の隆盛とこの地の繁栄を象徴している。

林業からゆずへ　ゆずが季節ごとに彩る中芸の風景

中芸のゆず栽培のはじまりは、江戸時代に遡る。当時、北川村で庄屋見習いをしていた中岡慎太郎が、自生するゆずに注目し、防腐や調味のために使えるようにと栽培を農民に奨励したとされ、現在もゆずの古木が山裾に残る。この地の暮らしに根づいてきたゆず栽培だが、それが産業として花開くのは1960年代以降のことである。

1960年代、天然林が枯渇する中で、中芸の人びとは、林業に代わる新たな産業を探さなければならなかった。そこで力を注いだのが、ゆず栽培である。身近にあったゆずの魅力と価値に改めて注目し、それを産業化すべく、りんてつの軌道が敷かれた川沿いにある田畑をゆず畑に変え、木材を運び出していた山間では、山面の限られた土地に石垣を築き段々畑を開いた。昔ながらの有機栽培にこだわりながらも、日本初となる機械式柚子搾汁機の開発やゆず加工商品の開発にも積極的に挑戦していった。

こうして産業化が進められた中芸のゆずは、今では作付面積200ヘクタールを越え、日本一の生産量を誇る。近年では、ヨーロッパに輸出されるまでになり、ゆずの風味を世界に届けている。

ゆず畑では、初夏に小さくかわいらしい白い花を咲かせ、夏には深く鮮やかな緑の葉っぱと果実を輝かせる。秋を迎え、ゆずの果実が熟すとともに濃い黄色に色づくと、あたり一帯に爽やかな香りが立ち込める。そうして収穫の時期を迎えると、ゆず収穫の安全祈願と初絞りを楽しむゆず祭りを皮切りに、ゆず満載の軽トラックや収穫の喜びにあふれる人びとで、中芸全体が活気づく。季節ごとに彩りを変える日本一のゆず畑が広がる景観を、目と鼻の両方で楽しむことができる。

ゆず香る中芸の食文化

古の時代から日本人が親しんできた風味であり、すまし汁の吸口に使われるなど「和食」に不可欠なゆずは、中芸の食文化にも欠かせない。

酸味が強く香り高いと評価される当地のゆずを皮ごと絞り、その持ち味を凝縮した「柚酢（ゆのす）」は、酢の物に使ったり、刺身にかけて食べたりと普段の食事にはもちろん、ハレの料理にも欠かせない。ハレの日を祝い客人をもてなす宴席「おきゃく」では、この地を流れる清流を用いて醸された土佐酒やゆず酒とともに、地元の新鮮で多彩な山海の幸を大皿に盛った皿鉢（さわち）料理が豪快に振る舞われる。皿鉢料理には、土佐湾沖で捕れたカツオなどの刺身、川で獲れるツガニの煮付けといった組物、そしてたっぷりの柚酢で仕立てる「ゆず寿司」が盛られる。リュウキュウ（ハスイモの茎）やタケノコなどの山菜を用いたゆず寿司、天然鮎や鯖などを一匹まるごと使ったゆず寿司を頬張れば、口いっぱいにゆずの爽やかな風味が広がる。

ゆずをふんだんに使って地元の幸を風味豊かに仕上げる郷土料理は、中芸の食文化として、今も人びとの暮らしのなかで受け継がれている。

「りんてつ」から日本一の「ゆずロード」へ

時代の変化をたくましく生きる人びとの手によって、中芸の風景は「林業」から「ゆず」へと変わり、木材を運んだ「りんてつ」の軌道は、ゆずを運ぶ「ゆずロード」に生まれ変わったのである。

中芸一帯を走るゆずロードをぐるりとめぐれば、ゆずの香りと彩りに満ちた景観と、ゆずの風味豊かな食文化を満喫することができる。

構成文化財一覧

〔01〕ゆず畑の景観

〔02〕ゆず料理

〔03〕柚子の古木

〔04〕柚子搾汁機

〔05〕ゆずはじまる祭

〔06〕慎太郎とゆずの郷祭り

〔07〕中岡慎太郎宅跡

〔08〕中岡慎太郎遺髪埋葬墓地

〔09〕千本山

〔10〕藩政期の植林地

〔11〕朝日出山の大杉

〔12〕材木流し（絵馬／多氣坂本神社）

〔13〕材木流し（絵馬／三光院）

〔14〕木材生産用具（馬路村郷土館）

〔15〕金林寺薬師堂

〔16〕北寺所蔵仏像群

〔17〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 エヤ隧道

〔18〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 バンダ島隧道

〔19〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 オオムカエ隧道

〔20〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 明神口橋

〔21〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 釜ヶ谷桟道

〔22〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 釜ヶ谷橋

〔23〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 平瀬隧道

〔24〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 五味隧道

〔25〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 落合橋

〔26〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 河口隧道

〔27〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 犬吠橋

〔28〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 井ノ谷橋

〔29〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 堀ヶ生橋

〔30〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 二股橋

〔31〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 小島橋

〔32〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 立岡二号桟道

〔33〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 八幡山跨線橋

〔34〕旧魚梁瀬森林鉄道施設 法恩寺跨線橋

〔35〕支線跡遺構群

〔36〕旧馬路営林署

〔37〕野村式機関車

〔38〕写真資料Ⅰ　寺田文庫

〔39〕写真資料Ⅱ　高知大林区署、高知営林局が撮影した大正～昭和初期の関連写真

〔40〕岡御殿

〔41〕濱川家住宅　蔵、離れ

〔42〕南商店　店舗兼主屋、外塀、内塀

〔43〕旧柏原家住宅
主屋及び離れ、表門、東土塀及び西土塀

〔44〕旧市川医院

〔45〕竹﨑家住宅（高田屋）主屋、離れ、蔵

〔46〕森家住宅（旧野村茂久馬邸）
主屋、蔵、西石塀、南石塀、東石塀

〔47〕濱田典彌家住宅
主屋、かま屋、米あずかり場、土蔵、石垣塀

〔48〕星神社のお弓祭り

徳島県那賀町
香美市
⑨千本山
370
馬路村
㊲野村式機関車
徳島県
海陽町
安芸市
㉘井ノ谷橋
㉗犬吠橋
北川村
D
⑩藩政期の植林地
⑪朝日出山の大杉
東洋町
③柚子の古木
㉒釜ヶ谷橋
㉙堀ヶ生橋
㉓平瀬隧道
㉑釜ヶ谷桟道
㉚二股橋
493
⑳明神口橋
⑲オオムカエ隧道
493
⑱バンダ島隧道
㉛小島橋
⑯北寺所蔵仏像群
奈半利川
⑰エヤ隧道
㊽星神社のお弓祭り
12
安田川
安田町
㉜立岡二号桟道
206
⑧中岡慎太郎遺髪埋葬墓地
⑦中岡慎太郎宅跡
田野町
⑥慎太郎とゆずの郷祭り
⑫材木流し（絵馬／多氣坂本神社）
C
B
A
奈半利町
室戸市
55
55
3km

A　奈半利町中心部

B　田野町中心部

C　安田町中心部

D　馬路村中心部

㉖河口隧道
12
㉕落合橋
⑭木材生産用具（馬路村郷土館）
馬路村役場
馬路村郵便局
㊱旧馬路営林署
安田川
⑮金林寺薬師堂
⑤ゆずはじまる祭
㉔五味隧道
300m

01 ゆず畑の景観

中芸地域

黄色い果実をつけるゆず畑。
その収穫のために村内外の人が集う風景があった。

ゆず畑

ガイドポイント

黄色いゆず畑

中芸地域の山間地の代表的な農産物であるゆずは、林業に代わって地域を支えている産業です。栽培面積は約230ヘクタール（令和6年）、多い年の生産量は4,000トン近くで、日本一を誇ります。ゆず畑は安田川・奈半利川の川沿いの山間等に広がっており、5月の2～3週間に小さくかわいい白い花を咲かせ、次第に深く鮮やかな緑の葉となり、10月中旬から11月末にかけて、黄色い果実を収穫します。季節ごとに彩りを変える日本一のゆず畑が広がる景観を、目と鼻の両方で楽しむことができます。

村外、県外に住む家族が収穫手伝い

11月。ゆずの収穫時期には、それぞれの地域の住民、老若男女の手を借りますが、それでも人手が足らないので、村外、県外に住んでいる子どもたちが帰ってきて収穫作業を手伝います。この時期、夕方の出荷場では「おお、元気だったか。晩に一杯飲もうや。」と、近所同士や、同級生同士など会話が交わされます。皆でゆずの収穫作業をする姿や、集荷場の会話なども、この時期ならではの風景といえます。

ゆずの木は2種類

ゆず畑を見ていると、種から育て実をつけるまで15年以上かかる実生（みしょう）と、カラタチに接ぎ木をして栽培し、5～6年で実をつけるゆずがあります。実生は木が高く、大きな鋭いトゲもあるのが特徴で、収穫には苦労しますが、酸味も強めで味わい豊かな風味が楽しめます。接ぎ木で栽培されたゆずは同じ間隔で植えられているので、その黄色い実が集まり、畑の中で映えます。

02 ゆず料理

中芸地域

果汁と果皮、独特の風味を醸し出すゆず。
中芸地域の暮らしのなかで受け継がれている。

ゆず玉、ゆず酢

ゆず酢を使った皿鉢料理

ガイドポイント

日本料理に欠かせない食材、調味料

ゆずは1000年以上日本人に親しまれてきたもので、その独特の爽やかな香りと果皮の色合いで、そのものがメインになることはありませんが、さまざまな料理の引き立て役として、日本料理（和食）には欠かせない重要な食材、調味料といえます。また、殺菌や防腐を目的として使われることもあります。中芸地域では家庭料理だけではなく、皿鉢料理やゆず（田舎）寿司など郷土料理に欠かすことはできないもので、今も食文化として暮らしのなかで受け継がれています。

身体に優しい効果がたくさん

ゆずには風邪の予防や疲労の回復、肌荒れなどに効果があるビタミンC、肌や体の老化を防止する効果が期待できるビタミンEやポリフェノールなどが豊富に含まれています。また果汁と果皮では、果皮のほうが圧倒的に栄養面で優れています。（五訂日本食品標準成分表より）。中芸地域では「お酢」といえば「ゆず酢」のことを指し、皮ごと絞ることで、香りや風味だけでなく、栄養も取り入れています。

家庭料理、ゆず（田舎）寿司、皿鉢料理

酢ものだけでなく、焼き魚や肉料理など、日常の家庭料理にゆず酢は欠かせない中芸地域。その代表的なものにたっぷりのゆず酢で仕立てる酢飯を使った「ゆず（田舎）寿司」があり、海苔巻や卵巻、リュウキュウ（ハスイモの茎）、タケノコ、ミョウガなどの山菜、天然鮎や鯖の姿寿司など、さまざまな種類をつくります。かつては刺身の皿鉢がでると、お醤油とゆず酢がそれぞれセットで出され、皆が好みで使い分けていました。

田舎寿司

03 柚子の古木

北川村

古くからゆず栽培をしていた地域のランドマークの巨木。

ゆずの古木

村 北川村指定天然記念物
2009(平成21)年3月　指定

樹齢	約300年
高さ	約10m
幹まわり	約1m50cm

ガイドポイント

300年生き続ける実生ゆず

北川村島集落には推定樹齢300年を越える実生ゆずの古木があり、樹高は10メートル強、幹まわりは1メートル半以上あります。北川村にはゆずの巨木が残っていますが、これが一番大きいようです。
北川村には実生の柚子が多く植わっており、巨木も多くあることから、古くからゆず栽培をしていたことがわかります。ゆずが、この地方で古くから人々の暮らしの中にありました。

接ぎ木のゆずもここからスタート

1965(昭和40)年代、奈半利川の電源開発、営林署関係で働いていた人たちが去っていくなかで、島や久江ノ上地区の農家の人たちがゆずに着目して、「島久江ノ上農事組合」をつくり、皆で接ぎ木、隔年収穫の解消をはじめとする品質管理、栽培方法などを手さぐりで研究していき、全国の先進例となりました。接ぎ木のゆず栽培は、ここからスタートしています。

人よりかかしが多い!?

島地区には2013(平成25)年からスタートした、「かかしの里」があります。「島地区が話題になるような、何か活性化する方法はないか?地域の人がクスッと笑ってくれるようなことをしたい。」と、ひとりの村民がはじめ、次第にかかし住民が増えていきました。自宅の庭やバス停に座っている様子は、まるで生きている人間のようにリアルです。全国ニュースにも取り上げられました。

04 柚子搾汁機（ゆずさくじゅうき）

中芸地域

ゆずの産業化に取り組んできた地域の、知恵と技の工夫が詰まった柚子搾汁機。

柚子搾汁機

ガイドポイント

コンテナをどっさり積んだ軽トラが走る

全国に先駆けてゆずの産業化に取り組んできた中芸地域では、農協やゆず集荷場などで使う大型機器の柚子搾汁機が、他地域に先んじて発達してきました。
ゆずの収穫期、コンテナをどっさり積んだ軽トラが中芸のゆずロードを通り、次から次へと農協の搾汁場（柚子搾り工場）やゆず集荷場に到着します。その日に集めたゆずはできるだけ、その日のうちに搾ることで鮮度の向上をめざして、フル稼働になります。これも中芸の11月の風景です。

家庭に2～3台の柚子搾汁機

ゆず農家に限らず、中芸地域の山間地の家庭にも柚子搾汁機が数台はあるといわれています。地元の大工さんに前作よりもっと効率的に絞れるものをつくってもらうなど、時代とともに発達してきた柚子搾汁機は、収穫の時期に活躍します。先代、先々代となる柚子搾汁機が残っている家庭も多く、展示用ではない、各家庭の生活用具として日常の暮らしのなかで見ることができます。

加工した果汁は ゆず製品となり県内外に出荷

中芸地域のゆずは収穫後、柚子搾汁機によって果汁になります。それを地域のJAや企業、地域活性のグループ、県内外の企業等によって、ドリンクや調味料、ゼリー、ジャム、マーマレード、ボディケア、化粧品など、多くの商品に加工され、県内外に出荷されます。
また、多くの規制をクリアして日本ではじめてゆず玉をヨーロッパに輸出するなど、ゆずを世界に届けている企業もあります。

05 ゆずはじまる祭

馬路村

収穫の安全祈願と初しぼりを楽しむ祭りで、村内外の人たちの交流がうまれる。

ゆずはじまる祭

ゆずの手しぼり体験

ガイドポイント

ゆず収穫の安全祈願と初しぼりを楽しむ

2006(平成18)年にスタートした「ゆずはじまる祭」は、馬路村で毎年10月末もしくは11月初めに開催され、ゆず収穫のはじまりを祝い、収穫の安全祈願と初しぼりを楽しむ祭りで、ゆずづくしの一日を楽しめます。馬路村農協ゆずの森をはじめ、村内各所で賑やかに行われ、村内外から多くの人が参加し、交流の場になっています。

目の前でしぼった今年のゆずの新酢

このお祭りに参加すれば、村の公認ゆずジュース「ごっくん馬路村」が給水所で飲み放題になります。参加無料のゆずの手しぼり体験、馬路温泉のゆず風呂を一日無料開放、馬路温泉前では森林鉄道が運行し、インクラインから秋の風景が見えます。また、目の前でしぼった今年のゆずの新酢やゆず製品、木のカバンや木工品販売があります。口いっぱいにゆずの香りが広がる馬路寿司やいなか寿司、名物のゆず酢どり、ゆずうどん、ゆず鍋、ゆずアイスなど、ゆずを味わえる料理の数々があり、ゆず・森林鉄道の雰囲気を楽しめます。

06 慎太郎とゆずの郷祭り

北川村

中岡慎太郎の顕彰とゆずの収穫を祝う祭りで、村全体を売り出すイベントに成長。

慎太郎とゆずの郷祭り

ガイドポイント

ゆず栽培を奨励した慎太郎

1988(昭和63)年、中岡慎太郎生誕150周年にスタートした「慎太郎とゆずの郷祭り」は、ゆず栽培を奨励した同村出身の中岡慎太郎の顕彰とゆずの収穫を祝う祭りです。
当初は命日である11月17日前後の日曜に開催され、慎太郎が好きだったといわれるイノシシ鍋を振る舞い、墓前祭、ゆず狩り体験などを行っていました。現在はゆず収穫の多忙な時期を避け、10月末もしくは11月初めになっています。

ゆずを楽しめる一日

このお祭りは、村内2会場(総合保健福祉センター、中岡慎太郎館周辺)で行われています。中岡慎太郎館の入場無料や、ゆず収穫体験、搾汁体験、先着でゆず玉のプレゼントをはじめ、ゆずをたくさん楽しめ、加工品があり、味わえる料理の数々が会場で販売されます。ステージでは様々なイベントが用意されています。
村内外から多くの人が参加し、交流の場になったお祭りは、村全体を売り出すイベントに成長しています。

中岡慎太郎館

07 中岡慎太郎宅跡（なかおかしんたろうたくあと）

北川村

ゆず栽培を奨励した中岡慎太郎の生まれ故郷に建つ生家。

県 高知県指定史跡　1968(昭和43)年6月 指定

中岡慎太郎生家(復元)外観

中岡慎太郎生家(復元)

ガイドポイント

慎太郎百年祭にあわせて復元

ゆず栽培を奨励した幕末の志士・中岡慎太郎は、1838(天保9)年4月13日に北川郷柏木村で生まれました。慎太郎が暮らしていた生家は、転売されて田野町内に移築された後、1907(明治40)年の台風で流されました。中岡慎太郎宅跡にある現在の建物は、慎太郎百年祭にあわせて1967(昭和42)年11月17日に復元されたものですが、北川村指定史跡に指定されています。母屋の広さは30坪、部屋は式台(三畳)、勘定の間(四畳半)、次の間(四畳)、客間(六畳)、奥の間(四畳半と三畳)、板間、土間があり、庄屋の家独特の間取りといえます。

生涯を維新回天のために尽くした志士

柏木の大庄屋の長男として生まれた慎太郎は、18歳の時に藩校田野学館で武市瑞山(半平太)と出会います。父の病気により20歳で庄屋見習いとしてゆず栽培と植林の奨励をおこなうなど農民のために尽力します。しかし半平太の人柄に惹かれ、24歳の時に土佐勤王党に加盟。その後脱藩し、薩長連合の実現、岩倉具視と三条実美の提携、論文「時勢論」の執筆、陸援隊結成、大政奉還の主張など、生涯を維新回天のために尽くしました。

慎太郎専門の博物館

宅跡前に建つ慎太郎専門の博物館「中岡慎太郎館」は、慎太郎30年の生涯を、ドラマチックに伝えてくれます。一階は慎太郎の人生を史実に基づき年代ごとに時系列で紹介。二階は遺された刀剣や書物、書簡、肖像画といった様々な資料から、本人や慎太郎と交流のあった幕末の志士たちの資料を中心に展示されています。

08 中岡慎太郎遺髪埋葬墓地（なかおかしんたろういはつまいそうぼち） 北川村

慎太郎の左となりに妻の兼（かね）、そのとなりに父・小傳二（こでんじ）、母・ウシの墓石が並ぶ。

村 北川村指定史跡　1964（昭和39）年8月　指定

松林寺

遺髪埋葬墓地

ガイドポイント

中岡家の墓所があった松林寺

1824（文政7）年に中岡要七（ようしち）が北川郷大庄屋としてきてから、中岡慎太郎の死後、養子となった照行（てるゆき）が1881（明治13）年に高知市へ引っ越すまで、中岡家は松林寺に墓所をおいていました。そのため、故郷にもたらされた慎太郎の遺髪は、松林寺の墓地に埋葬されました。この遺髪は「禁門の変」（1864年）の前に家族に宛てた手紙に添えられていたものだといわれています。慎太郎の遺髪墓地の左となりに妻の兼（かね）、そのとなりに父・小傳二（こでんじ）、母・ウシの墓石が並んでいます。

石段を踏み、山門をくぐった慎太郎

中岡家の墓所になっていた松林寺跡は、戦国時代に北川郷を支配していた北川玄蕃頭（げんばのかみ）の菩提寺でした。明治、大正時代にたびたび火災にあい、本堂や観音堂などは焼失し、創建時からの遺構は、山門と石段のみのようです。ここは慎太郎の幼少の頃から変わっておらず、当時の面影を残した場所といえます。

ゆかりの土地のみどころ

慎太郎の生誕地ゆえ、中岡慎太郎館、生家を中心に、慎太郎を体感できる場所や碑、像があります。北川村青年団が慎太郎を知る田中光顕（元宮内大臣、陸援隊）に相談して、1927（昭和2）年に建立した「中岡慎太郎顕彰碑」をはじめ、1999（平成11）年、生誕160年を記念して建立した「中岡慎太郎像」、慎太郎が川遊びをしていた「巻ノ淵」、田野学館へ毎日片道90分通学した道を「向学の道」、その途中にある並木を幼少時代の名から付けられた「光次の並木」、庄屋見習いの時におこなった「ハモド耕地整理跡」などがあります。

09 千本山（せんぼんやま）

馬路村

魚梁瀬杉の巨木を見ながら、200年、300年の命の森の中を歩く。

ガイドポイント

魚梁瀬杉を主体とした天然林

県木魚梁瀬杉が育つ千本山風景林は、「日本美しの森　お薦め国有林」にも指定されています。
魚梁瀬丸山公園から車で約30分走ると、千本山登山口に到着します。ここは樹齢200年から300年の魚梁瀬杉を主体とした天然林が残されており、ヒノキ、ツガ、トガサワラなどがあります。登山口の標高は550メートル、登山の目安となる展望台の標高が900メートル。この間は2.5キロメートルで、登りが約2時間、下り約1時間が目安になります。

登山口から展望台まで見どころがたくさん

登山口の橋を渡ると「橋の大杉」があり、これは林野庁指定の「森の巨人たち100選」に選ばれている杉であり、樹齢は250年以上、樹高は54メートル、胸高直径は2メートル以上もあります。
ここから巨木が林立する風景が展望台まで続きます。根が持ち上がったようになり下に空洞を作っている「股くぐりの杉」、千本山の巨木の森をカメラに収めることができる「写真場」、杉の樹高があまりにも高く、見上げた時に、頭に巻いてあった鉢巻きが後方へ落ちたという「鉢巻き落とし」など、見どころポイントが続きます。

空気や水を生み出す森

県内の山歩きを楽しむ山とは趣が違う千本山は、大半は木の葉が落ちてつくられた腐葉土の森を歩くことです。ここは空気や水を生み出す森であり、200年、300年の深い命の森の中を歩くのが特徴といえます。

10 藩政期（はんせいき）の植林地

馬路村

藩財政を助け、重宝された御留山の魚梁瀬杉。

※　馬路村内の藩政期の植林地は、案内人無しで行くことは困難です。

ガイドポイント

土佐藩が魚梁瀬杉を管理

土佐藩は、森林資源を維持するため、領内の奥山を藩が管理する御留山とし、樹木の伐採を禁止するなど厳しく管理しました。中芸地域では、全国屈指の杉高級材を生む魚梁瀬杉などが保護の対象となりました。太くて節がなく、淡紅色で特有の香りを持つ魚梁瀬杉は、京都の方光寺大仏殿、二条城や江戸城などに御用木として納められたほか、大阪での販売などで藩財政を助け、重宝されました。土佐藩は、江戸時代後期になると植林も行いました。

天保時代の植林地

馬路村の朝日出集落奥の国有林内にある植林地は、1843（天保14）年に植栽されたもので、樹高30メートル以上のスギやヒノキの巨木が生い茂っています。財政困難であった地元の村が、御留山の払い下げを受けて木を伐採し、その跡に苗木を植栽したとされています。林内には森林鉄道の支線の軌道跡も残っています。

中芸地域では、北川村の野根山街道沿いにも1833（天保4）年の植林地があります。

11 朝日出山の大杉（あさひでやま おおすぎ）

馬路村

樹齢が推定800年、幹の周囲は10メートル強。
その大きさに圧倒される天然記念物。

村 馬路村指定天然記念物
1987(昭和62)年1月　指定

樹齢　約800年
高さ　約34m
幹まわり　約10m

ガイドポイント

圧倒される大きさ

馬路村の玄関口(東側)の山側にある集落から、車で約30分の距離に「朝日出山の大杉」へと続く登山口があります。更に歩くこと20分程度で大杉に到着します。樹齢は推定で800年。幹の周囲は10メートルを超えており、その大きさに圧倒されます。馬路村指定天然記念物に指定されています

天然林の杉を伐採した切り株が見事

朝日出山の大杉へと続く登山道の途中にも見どころがあります。昭和30年代に天然林の杉を伐採した切り株と、その後に植林された人工林の杉が60年程度経過した様子の両方を見ることができ、時間経過を感じられます。この切り株は、森林鉄道で搬出していた頃のものです。

馬路村の守り神として住民が尊信

ここには伝説が残されています。中世時代、馬路村を治めていた領主は、馬路蔵人守長正でした。長宗我部元親に降伏した安田三河守鑑信は軍勢を差し向け、長正とその子・隆正は現在の馬路小中学校の近くにあった馬路城に立てこもり防戦し、一度は勝利しました。しかし二度目の戦の際には、長正は既にこの世になく、隆正はこの朝日出山の大杉で「われはここで死すとも、魂魄はこの大杉にとどまって、馬路の里人を守るであろう」と言葉を残し、最期を遂げました。後年、隆正の子・忠朗丸(後に庄屋)が成人し、大杉の元に祠を建てました。すると不思議なことに大杉の南面の枝が全て馬路村の方へ向いていたそうです。以来、馬路村の守り神として住民に尊信されました。

12 材木流し（絵馬／多氣坂本神社）

奈半利町

およそ1200年の歴史がある多氣坂本神社の、拝殿にある木材流し絵馬。

町 奈半利町指定有形文化財
（美術工芸品）
1970（昭和45）年6月　指定

作　者　坂本茂三郎
制作年　不明

ガイドポイント

藩政時代、明治初期の木材運搬

中芸地域の林業の長い歴史の中で、藩政時代の木材の搬出は、奥地で伐採した材木を奈半利川、安田川へ流し、河口から船積みして阪神方向に運んでいたものです。多氣坂本神社の拝殿にあるこの絵馬は、材木の積み上げやトロで運搬している作業状況等を描いたもので、当時をしのぶ大切な郷土の風俗画といえます。作者は、上長田出身の坂本茂三郎氏で、彼は河田小龍の弟子でした。奈半利町指定有形文化財（美術工芸品）になっています。

延喜式神名帳に書かれた神社

絵馬が奉納されている多氣坂本神社は、おおよそ1200年の歴史があります。醍醐天皇の御世撰上された「延喜式神名帳」にその名のみえる神社は、神祇官所管の社と呼ばれ、これが式内社と呼ばれています。

土佐の国には21社があり、安芸郡には室津神社、多氣神社、坂本神社の3座があり、そのうち2座が合祀され、多氣坂本神社になったと伝えられています。神社入り口には1916（大正5）年につくられた石の太鼓橋、参道には亀の形をした手水鉢があるなど、見所も多くあります。

「一千有余年の鎮守の森は現在奈半利郷分七ヶ部落の総氏神であり、延喜の古社のご神徳は広く内外からの崇敬を多しとしている。」と記されています。

多氣坂本神社の石の太鼓橋

13 材木流し（絵馬／三光院）

奈半利町

奈半利川河口から船積みする木材流しを描いた絵馬。

所有者 三光院
写真提供 高知県立歴史民俗資料館

町 奈半利町指定有形文化財
（美術工芸品）
1970（昭和45）年6月　指定

作　者　不明
制作年　不明

ガイドポイント

郷土の貴重な資料

中芸地域の林業の長い歴史の中で、藩政時代の木材の搬出は、奥地で伐採した材木を奈半利川へ流し、河口から船積みして阪神方向に運んでいたものです。
法恩寺の三光院拝殿にある絵馬も多氣坂本神社の絵馬と同様の、材木流しを描いた郷土の貴重な資料です。奈半利町指定有形文化財（美術工芸品）になっています。（令和7年現在、高知県立歴史民俗資料館に保管）

法恩寺、三光院周辺を散策

法恩寺への参道としてつくられた跨線橋は森林鉄道遺構として国指定重要文化財になっています。
1734（享保19）年、同院の槿大僧都町田六右衛門が、大和国大峰山竹林寺より二体の役の行者座像のうち一体をゆずりうけ、この尊像を背に持ち帰り、三光院に本堂を建立して祀ったと伝えられています。それは町指定文化財に指定されています。
また、三光院の境内に群生する椎（しい）の自然林も町の天然記念物第一号に指定されています。この椎は樹齢数百年と推定されています。
法恩寺の三光院とその周辺には、奈半利町の貴重なものが集っています。

三光院

14 木材生産用具（馬路村郷土館）

馬路村

人力で伐採・搬出した山仕事の道具が数多く展示されている。

馬路村郷土館

林業用具

ガイドポイント

山仕事の道具たち

馬路村の民俗文化財や暮らしの記録など約2900点が展示されている馬路村郷土館は、1981（昭和56）年に開設しました。その中には、魚梁瀬杉を人力で伐採・搬出していた時代、木を伐る「そまのこ（鋸）、おが」、丸太の皮などの荒削りに使われた「ちょうな（斧）」をはじめ、つる、すぎ皮はぎ、刈あけがま、林尺、はつり、とび、なた、手かぎなど、木材生産用具、山仕事で身につけていた道具が数多くあります。また、木材の木目・肌目・樹皮等を観察するためにある、県内で唯一の「材鑑」、森林鉄道や木材搬出などの写真展示があります。

暮らしの記録がある

1・2階に農業道具、養蚕道具、生活道具などがありますが、書（掛け軸）や絵馬、神輿など文化財の展示や、郡奉行の命により作成された幕末期の村の農業風俗慣習等実態が克明に記録された1857（安政4）年の「馬路村風土取縮差出控」は、江戸時代末期の資料として県内外で価値の高い資料とされています。

杉直径170cmを、長さ105cmのそまのこを用いていて約2時間で伐倒した。

15 金林寺薬師堂（こんりんじやくしどう）

馬路村

室町時代中・後期の建築様式がある四国東南部を代表する薬師堂。

国 国指定重要文化財（建造物）
2002(平成14)年5月　指定

年　代：15世紀末期頃（室町後期）
構造等：桁行三間、梁間四間、一重、寄棟造、銅板葺

ガイドポイント

建築文化の成熟を示す

真言宗の古刹（こさつ）で、寺伝では807（大同2）年に弘法大師が開創したといわれている金林寺薬師堂は、四国東南部で初の国重要文化財（建造物）に指定されています。薬師堂は軒を支えるために垂木を用いず、板軒とする珍しい手法で、優美な外観をもち、簡素ながら檜、杉の良材を用いた上質なつくりに特徴があります。16世紀初頭以前にさかのぼる数少ない例として貴重であり、この地域の建築文化の成熟を示しています。

1518年の裏書

薬師堂は、桁行３間、梁間４間の寄棟造りで、床は畳敷きで外周に縁をめぐらし、柱は角柱で大きい面が取られています。内部は外陣と内陣からなります。屋根は寄棟造、銅板葺で、建築細部は室町時代中・後期の様式の特徴があり、厨子の露盤天板裏面の墨書から永正15年とあり、1518年のものと判明しています。
木造不動明王立像、木造毘沙門天立像は国の重要文化財で、そのほかにも県、村指定の仏像が多数あります。

境内の南北に階段が

薬師堂の通称は「お薬師さま」といわれ、例年1月12日に行われる厄除けは、県東部で有名です。境内に上がる階段は南と北にあり、北の階段を上がると本堂が、南の階段を上がっていくと薬師堂が正面にあります。
また、弘法大師の一夜建立という逸話もあります。柱は角柱で大きい面が取られています。

16 北寺所蔵仏像群（きたでらしょぞうぶつぞうぐん）

安田町

高知県の国指定重要文化財の9分の1、9躯の仏像が所蔵されている。

国 **国指定重要文化財**（彫刻）
1911（明治44）年8月　指定

北寺所蔵仏像群（9躯）
- 木造薬師如来坐像（もくぞうやくしにょらいざぞう）
- 木造釈迦如来立像（もくぞうしゃかにょらいりゅうぞう）
- 木造菩薩形立像（もくぞうぼさつぎょうりゅうぞう）（1～5号）
- 木造持国天立像（もくぞうじこくてんりゅうぞう）
- 木造増長天立像（もくぞうぞうちょうてんりゅうぞう）

ガイドポイント

小像ながらよく整った佳品

北寺の創建は「土佐国編年紀事略」によると703（大宝3）年で、室戸岬の東寺（最御崎寺）、室戸の西寺（金剛頂寺）に対して、北寺とよばれるほどの歴史があります。ここには高知県全体の国指定重要文化財のうち9分の1にあたる9躯の仏像が所蔵されています。

本尊は木造薬師如来坐像で、高さ49.8センチメートルで膝前が別木、総体に省略的手法がとられています。木造菩薩形立像は全部で5躯あります。

9躯の仏像すべて1メートルに満たない小像で、カヤ材の一本造り。土佐の山間部の仏像に共通している「古制（古いしきたり）」を保っています。北寺の仏像群は、小像ながらよく整い、趣があります。

馬路の杉を安田川で流す

弘法大師が806年～810年（大同年間）に室戸西寺を建立するとき、馬路村の安田川上流よりスギなどの丸太を流していましたが、北寺付近はちょうど川が蛇行しているので丸太が突き当たり止まってしまう場所があり、そこを流す作業をする時に事故が頻繁に起きたという話を聞いた弘法大師が、その一部の材を使って建立したと伝えられています。

17 旧魚梁瀬森林鉄道施設 エヤ隧道（ずいどう） 安田町

1911（明治44）年につくられた機能とデザインを兼ねた隧道。

国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

建設年：1911（明治44）年
構造等：石造隧道
延　長：33.2m
東坑門翼壁附属

ガイドポイント

アーチの頂部には五角形の盾形の要石

川の屈曲部分に張り出して尾根の岩盤を貫いてつくられた石造隧道で、川に沿ってゆるやかにカーブしています。
延長は33.2メートル。トンネル断面は、側壁が路盤に対して垂直に立ち上がり、半円ヴォールトのアーチが載る形式です。内法幅は約3.0メートル、内法高は約3.5メートル。路盤から笠石上端は約5.3メートルです。坑門の意匠は南北両面とも同形式で、アーチ、ウイング、釜石で構成されています。アーチの頂部には五角形の盾形の要石が付けられています。

当時の隧道の構造を伝える遺構

1911（明治44）年建造の隧道には川下から順に番号がつけられていました。東西両側ともに、隅石右側の下から6石目の表面に「I」の刻印があり、開通当時の建造を証明しています。現在は川側の屋根の張り出し部を削って自動車道が設置され、隧道の坑門は東西ともに閉められています。隧道としての機能はありませんが、逆に廃線時の状態が残っており、当時の隧道の構造を知るうえで重要な遺構です。隧道をつくるうえで、当時は安田川にある大きな岩盤や岩石を選び、川辺で職人が加工して、それを積んでいったと伝えられています。

撮影ポイント

日浦橋を対岸に渡り上流に進むと道路脇に見えます。道路や安田川を構図に取り入れるのもよさそうです。

18 旧魚梁瀬森林鉄道施設 バンダ島隧道（じまずいどう） 安田町

**開通当初の姿をよく残している隧道は、
今も町道として町民の暮らしの一部になっている。**

国 **国指定重要文化財（建造物）**
2009（平成21）年6月　指定

建設年：1911（明治44）年
構造等：石造隧道
延　長：37.5m
西坑門翼壁及び上部擁壁附属

ガイドポイント

町道にある隧道

町道「与床・明神口橋線」に位置する隧道で、尾根の岩盤を貫いて設けられています。延長は37.5メートルで、北東から南東へゆるやかにカーブをしています。路盤に対して側壁が垂直に立ち上がり、半円ヴォールトのアーチを載せる形式です。内法幅は約3.1メートル、内法高は約3.5メートル。路盤から笠石上端は約5.3メートルです。坑門の意匠はシンプルで、アーチ、ウイング、釜石で構成し、南北とも同形式です。アーチの頂部には五角形の盾形の要石が付けられています。

警備する島

バンダ島隧道は、特に大きな修復もなく、1911（明治44）年開通当初の姿を残しています。北側の擁壁も、整った切石を積み上げており、当初のものと考えられます。南坑門の手前に設けられた擁壁は、隧道本体と石切の状態や積み方が異なるため、後世のものである可能性がありますが、見比べる楽しみもあります。南側坑門に「II」と刻印されています。また、バンダの名前は、「警備する」という意味があり、その村を守る警察が住んでいたエリアといわれています。また地形的に島のようになっているので今の名前になったと伝えられています。

19 旧魚梁瀬森林鉄道施設 オオムカエ隧道（ずいどう） 安田町

周囲の自然環境と一体化した遺構は、代表的な散策コースのひとつ。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

国 近代化産業遺産
2009（平成21）年2月　認定

建設年：1911（明治44）年
構造等：石造隧道
延　長：36.7m（重要文化財指定7.0m）

ガイドポイント

ほぼ直線の隧道

川の屈曲部に張り出す尾根を貫き、切石砂岩の空積みでつくられた石造の隧道です。明神口橋の近くに位置して、2ヵ所同時に歩いて楽しめる位置にあります。隧道の延長は7.0メートルで、ほぼ直線です。路盤に対して側壁が垂直に立ち上がり、半円ヴォールトのアーチを載せる形式。内法幅は約3.1メートル、内法高は約3.8メートルです。
現在は町道の一部として使用されています。南坑門周辺7メートルの区間が重要文化財に指定されました。また「Ⅲ」の刻印もあります。経済産業省の近代化産業遺産にも認定されています。

安田川の渓谷美を

現在、北坑門はコンクリートと波板鉄板により補強がされており、南坑門と比べて趣が違いますが、その周辺は、安田川の渓谷美をはじめ、森林鉄道軌道の中でも代表する散策コースです。周囲の自然環境と一体化した遺構として、貴重な遺産であるといえます。

南坑門側

北坑門側

撮影ポイント

明神口橋を渡ってすぐ、橋の反対側の入り口は建造当時のままで、石積みと苔むした岩壁との対比もおもしろいでしょう。

20 旧魚梁瀬森林鉄道施設 明神口橋（みょうじんぐちばし） 安田町

地元に愛される「赤鉄橋」は、桧材の木造の橋から昭和4年に鋼製トラス橋へ。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

国 近代化産業遺産
2009（平成21）年2月　認定

建設年：1929（昭和4）年
構造等：鋼製単トラス桁橋
橋　長：43.2m
橋台2基付

ガイドポイント

安田川本流を渡る

オオムカエ隧道の東の渓谷にかかる下路式の鋼製単トラス桁橋で、安田川本流を渡るためにつくられています。橋長は43.2メートル、全高は6.28メートル、幅は4.64メートルで、単線仕様だったことがうかがえます。

明神口橋は、1912（大正元）年に桧材の木造で建造されましたが、機関車の導入に伴い、1929（昭和4）年、現在の鋼製トラス橋に架け替えられました。端柱には、製作を記した銘板が取り付けられています。軌道部分は撤去され、スチールの車道と手すりが取り付けられましたが、トラス橋、橋台ともに当時の姿を残しています。2005（平成17）年に橋の塗り替え工事が行われています。

大正・昭和の技術が伝える橋

トラスは下路式のプラットトラスで、中央の3格間のみ、斜材をX字に交差するようにして、中央部分の応力を分散させています。橋台は、開通当時の木製トラス橋台を踏襲して、岩盤の一部を崩し、切石を布積（各段の高さを水平に揃えて、継ぎ目が一直線になる）で積み上げています。

地元の人たちには「赤鉄橋」として親しまれている明神口橋は、安田川に架かる森林鉄道の代表的な遺構で、経済産業省の近代化産業遺産にも認定されています。現在は町道の一部として、町民の生活に利用されています。

撮影ポイント

下流川岸から全容を、また橋上でトラスの造形美を狙うのもよいでしょう。

21 旧魚梁瀬森林鉄道施設 釜ヶ谷栈道（かまがたにさんどう） 安田町

現存する遺構唯一の石造アーチ橋で、アーチ内には巨岩が見える。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

国 近代化産業遺産
2009（平成21）年2月　認定

建設年：1927（昭和2）年
構造等：石造単アーチ橋
橋　長：12.3m
親柱2基及び高欄付、南北擁壁附属

ガイドポイント

1927（昭和2）年に架け替え

安田川に張り出す岩盤上に栈道が出来たのは、1911（明治44）年の田野～馬路間の開通時です。当初は木造トラス橋として建造されましたが、機関車の導入に伴い、1927（昭和2）年に半円アーチ形の単アーチ橋に架け替えられました。これは欄干の親柱に記載があります。
橋長は12.3メートル、橋脚最下部からの高さは約8.2メートルです。現存する森林鉄道遺産唯一の石造アーチ橋で、経済産業省の近代化産業遺産にも認定されています。

吊り橋からの眺め

現在は馬路村につづく県道の一部として使用されており、車で通行しているぶんにはほとんど気づきませんが、島石ピクニック広場の吊り橋からは、お互い良く見える鑑賞ポイントです。
アーチ内に巨岩が埋め込まれたように見える独特の景観を誇ります。付近は遊歩道が整備され、栈道と合わせて釜ヶ谷橋を見ることができます。

島石ピクニック広場吊り橋

撮影ポイント

島石ピクニック広場の吊り橋を対岸に渡ると栈道のアーチが良く見えます。
釜ヶ谷橋とツーショット（P35）も狙えます。

22 旧魚梁瀬森林鉄道施設 釜ヶ谷橋（かまがたにばし） 安田町

橋の南北には石造の擁壁が残っており、その趣を今に伝える。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

建設年：1926（大正15）年
構造等：鋼製単桁橋
橋　長：12.3m
橋台2基付、南北擁壁附属

ガイドポイント

木造トラスから プレートガーダー橋へ

釜ヶ谷桟道のすぐ上流部にあるのが釜ヶ谷橋で、安田川支流の釜ヶ谷谷川に架かる単線仕様の上路式鋼製単桁橋です。橋長は12.3メートルで、開通当初は木造トラス橋として建造されましたが、機関車の導入に伴い、1926（大正15）年にプレートガーダー橋に架け替えられたようです。森林鉄道廃線後に車道として整備をされましたが、谷川の川下側に架かる桁は、森林鉄道時代に建造されたもの。橋の南北には石造の擁壁が残っており、その趣を今に伝えます。現在は馬路村につづく県道の一部として使用されています。

釜ヶ谷橋と桟道を歩く

安田町にはいろいろな蛇の逸話が語り継がれていますが、釜ヶ谷にも悲しい女性の話が残されています。島石ピクニック広場とその周辺は遊歩道が整備され、釜ヶ谷橋と桟道を歩いて見ることができます。

撮影ポイント

釜ヶ谷川畔に降りると橋を下から狙えます。また、安田川対岸からだと釜ヶ谷桟道とツーショットも撮れます。

釜ヶ谷桟道と釜ヶ谷橋

23 旧魚梁瀬森林鉄道施設 平瀬隧道（ひらせずいどう） 馬路村

遺構群のなかで2番目に長い隧道。切石およそ20段を積んだ迫力。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

建設年：1911（明治44）年
構造等：石造隧道
延　長：70.6m
西坑門翼壁附属

ガイドポイント

全長が71.4メートル

安田川沿いの西岸、尾根が川に突出した部分を貫き、切石砂岩の空積みでつくられた石造隧道です。延長は70.6メートルで、森林鉄道遺構群の中では長い隧道のひとつです。
トンネルは半円アーチ形で、内法幅は約3メートル、内法高は約3.4メートル。坑門アーチの頂部には五角形の盾形の要石が付けられています。右側の隅石に「V」の刻印があり、1911（明治44）年の開通当時の建造を証明しています。

自然の岩盤と人工構造物の構図

南坑門の山側には、切石およそ20段を積んだ石積擁壁と重なり、迫力があります。また北側の坑門も自然の岩盤に石積の人工構造物がはりまこむ、対比的な構図を楽しむことができます。
ただ、現在は隧道として機能しておらず、未利用の状態で、対岸や周辺からの観賞となります。

撮影ポイント

馬路すぐ手前の県道脇にあります。
石積みの様子が見やすいので、上手く活かしたいところです。

24 旧魚梁瀬森林鉄道施設 五味隧道（ごみずいどう） 馬路村

馬路村の出入口にあたる場所にあり、道路になった部分と隧道が確認できる。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

国 近代化産業遺産
2009（平成21）年2月　認定

建設年：1911（明治44）年

構造等：石造隧道

延　長：36.6m

ガイドポイント

隧道とガーダー橋

安田川沿いで、馬路村の出入口ともいえる場所にあるのが五味隧道で、1911（明治44）年の開通時に建造されています。ただ隧道の上に自動車道を通すため土で埋められ、川上側にはアーチ形の坑門と約5.5メートルが現存しています。またその先にはガーダー橋の軌道跡もあります。この隧道は石積構造で、アーチも石材を用いて長手積に。隅石は小面・横面を交互に積み重ねた仕上げです。坑門には「Ⅶ」の刻印があります。

馬路に帰ってきたことを実感する場所

安田から馬路に入る時、川下から隧道をぬけた途端、目の前に村の風景がぱっと広がり、馬路に帰ってきたことを実感。見送る時は隧道で汽車の姿は一度消えますが、隧道を抜けたあとちらりと姿が見え別れを惜しんだそうです。馬路の人たちにとって、こうした想いが詰まった場所です。現在は立入禁止となっていますが、馬路村ふるさとセンター「まかいちょって家」などから見ることができます。経済産業省の近代化産業遺産にも認定されています。

撮影ポイント

並行する村道から馬路橋と川をバックに撮ることが可能です。また対岸の「まかいちょって家」からの眺望もよく、おすすめです。

25 旧魚梁瀬森林鉄道施設 落合橋（おちあいばし） 馬路村

落合橋と馬路温泉一帯のコースで散策と体験乗車ができる。

国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

建設年：1925（大正14）年
構造等：鋼製二連桁橋
橋　長：37.0m
橋台2基及び橋脚1基付

ガイドポイント

国指定重要文化財、安田川に架かる

馬路温泉の近くにある落合橋は、安田川に架かる単線仕様の上路式鋼製桁橋（ガーダー橋）で、橋長は37.0メートルです。1925（大正14）年につくられていますが、自動車が通る今の橋は、その時代をあまり感じさせません。現在は馬路村の村道として供用されています。しかし桁橋はその時代の名残があります。桁の側面に、「大正十四年　株式会社横河橋梁製作所大阪工場製作」の銘板が付いています。橋の川上側には、かつて、線路に沿って製材所があり、天然木の木材を製材していました。

森林鉄道とインクライン

馬路温泉の前の小さな谷沿いを、森林鉄道の蒸気機関車を再現した車両が日曜と祝日に走っています。また、エンジン動力を必要としないケーブルカー・インクラインも運行しています。これは最大傾斜34度の急斜面をゆっくりと約5分かけて移動します。頂上からの眺めは、馬路村の中心部を一望できます。

インクライン

撮影ポイント

一見普通の道路橋にみえますが、橋脚が特徴的なのでそこを狙いたいところです。

26 旧魚梁瀬森林鉄道施設 河口隧道（こうぐちずいどう） 馬路村

森林鉄道遺構のなかで一番長い隧道は、中に待避所や照明がついている。

河口隧道（東坑門）

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

国 近代化産業遺産
2009（平成21）年2月　認定

建設年：1913（大正2）年 建設
構造等：石造隧道
延　長：89.9m

ガイドポイント

川下から8番目

馬路ー魚梁瀬間に森林鉄道が開通した1913（大正2）年頃の建造といわれる河口隧道は、1911（明治44）年建造の隧道と同様に、坑門に「Ⅷ」の文字が刻印されています。当時、川下から8番目の隧道となります。

これは切石砂岩の空積みでつくられた石造隧道で、延長は89.9メートル。森林鉄道遺構のなかで一番長い隧道です。トンネル断面は半円アーチ形で、内法幅は約3.0メートル、内法高は約3.6メートル。アーチも石材を用いた長手積です。坑門アーチの頂部には五角形の盾形の要石が付けられています。

生活道路として活用

現在は村道として利用されていますが、この隧道は長いので、内部には照明と、待避所があります。両側に排水用の溝もあり、生活道路として使われ続けている貴重な例といえます。経済産業省の近代化産業遺産にも認定されています。

河口隧道（西坑門）

撮影ポイント

西坑門は鉄板にて補強されていますが、東坑門は建築当時の風情が残っているので、広角レンズで抗道内部の石積みを狙うといいでしょう。

27 旧魚梁瀬森林鉄道施設 犬吠橋（いぬぼうばし） 北川村

峻険な山間部に架かる深緑の中に映える赤い橋。

犬吠橋（破損前）

国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

建設年：1924（大正13）年
構造等：鋼製単トラス桁橋
橋　長：41.0m
両側鋼製側径間及び橋台2基付、東西擁壁附属

ガイドポイント

ずっと眺めていたい橋

久木（くき）と釈迦ヶ生（しゃかがうえ）の間、奈半利川支流の犬吠谷川に架かる犬吠橋は、1915（大正4）年の軌道開通時は木造トラス橋でした。そして機関車の導入に伴い、1924（大正13）年に、真っ赤な塗装が映える上路式の鉄トラス橋に架け替えられました。

橋長は41.0メートルで、単トラス桁の主径間と一形桁の側径間から構成されています。幅は約4.3メートル、トラスの下弦から路面までの高さは約7.6メートルで、峻険な山間部のなかに架けられています。その頃の谷底から足場を組んだ様子は記録写真に残されています。現在も景観上、とても貴重な存在といえます。

1961（昭和36）年の道路化によって

現在は県道の一部として使用されていますが、1961（昭和36）年の道路化に伴い、アスファルト舗装がされ、ガードレールが設置されています。機関車導入前は、川下から川上へ、空きトロッコの引き上げには犬を用いていて、ここでよく鳴いたため、その当時の名残りで犬吠谷川の名前が付けられたのではないかという説もあります。

撮影ポイント

2025（令和7）年現在、破損による通行止のため渡ることはできませんが、仮設道からトラスの全容を見ることができます。

犬吠橋（2018年1月撮影）
橋の落下を防ぐ仮受け台の工事中

28 旧魚梁瀬森林鉄道施設 井ノ谷橋（いのたにばし） 北川村

森林鉄道時代を知る人は笹ヶ瀬谷橋と呼び、枕木の隙間から見える深い谷底が有名だった。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

建設年：1924（大正13）年
構造等：鋼製単トラス桁橋
橋　長：54.5m
両側鋼製側径間及び橋台2基付、南北擁壁附属

ガイドポイント

魚梁瀬ダム近くの橋

釈迦ヶ生（しゃかがうえ）から魚梁瀬にむかう県道からはずれ、魚梁瀬ダムに向かう奈半利川支流の笹ヶ瀬谷川に架かる単線仕様の上路式鋼製橋梁が井ノ谷橋です。
1915（大正4）年の軌道開通時は木造トラス橋でした。そして機関車の導入に伴い、1924（大正13）年に、鋼トラス橋に架け替えられました。
橋長は54.5メートル、トラス部分のスパンは約36.4メートル、幅は約4.3メートル、トラス下弦から現路面までの高さは約7.2メートルです。単トラス桁の主径間と一形桁の側径間で構成されています。

廃線道路化直後の様子を伝えている

森林鉄道時代を知る人たちには、この橋を笹ヶ瀬谷橋と呼び、枕木の隙間から深い谷底が見える橋として有名でした。この橋の近くの釈迦ヶ生集落では、かつて1000人ほどが暮らしていて、映画館やパチンコなど娯楽施設があり賑わっていたそうです。現在は村道の一部として使用されています。

撮影ポイント

赤いトラスが美しいのですが、それを見通せる場所がなく撮影は困難です。
無難にトラスを中心に周囲のスギ林と上手く組み合わせたいところです。

29 旧魚梁瀬森林鉄道施設 堀ヶ生橋（ほりがをばし） 北川村

待避所やバルコニーが充実していることが、森林鉄道の情景をしのばせる。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

国 近代化産業遺産
2009（平成21）年2月　認定

建設年：1941（昭和16）年
構造等：鉄筋コンクリート造単アーチ橋
橋　長：46.9m
親柱4基及び高欄付、東西擁壁附属

ガイドポイント

我が国最大級のアーチ

堀ヶ生隧道に隣接して奈半利川を東西に渡る堀ヶ生橋は、1941（昭和16）年につくられています。橋長は46.9メートル、幅約4.1メートル（道路部幅員約3.5メートル）、一連のアーチ橋で、両岸を切石布積の石垣でかため、橋台上にコンクリート造の充腹式単アーチ橋をかけています。また、橋の両側には待避所、中央に台形平面のバルコニーがあります。橋の規模の割に、待避所やバルコニーが充実していることが、森林鉄道の情景をしのばせます。
近代に建造された充腹式単アーチ橋で我が国最大級を誇ります。経済産業省の近代化産業遺産にも認定されました。

余ったレールを活用

戦時中という時代背景のためか、橋は無筋コンクリートでつくられましたが、補強のために森林鉄道の余ったレールが使われたといわれています。欄干や親柱の意匠、無筋コンクリートの構造は、二股橋にも通じています。現在は県道の一部として使用されています。

撮影ポイント

橋のたもとから遊歩道に降りると下から眺めることができます。清流とアーチの美しさを合わせるといいでしょう。

30 旧魚梁瀬森林鉄道施設 二股橋（ふたまたばし） 北川村

二連アーチ橋を「眼鏡橋」と呼び、地元で親しまれている。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

国 近代化産業遺産
2009（平成21）年2月　認定

建設年：1940（昭和15）年
構造等：コンクリート造二連アーチ橋
橋　長：46.5m
親柱4基付、南北擁壁附属

ガイドポイント

無筋コンクリート、国内最大級

奈半利川からすぐ、支流の小川川に架かる無筋コンクリート造の充腹式二連アーチ橋は、両岸に切石材を布積した重力式橋台を置き、橋の中心に橋脚を立てています。橋長は46.5mで、道路の幅が約3.2メートルあります。これも堀ヶ生橋と同様、無筋コンクリート造橋としては国内最大級です。
建造は1940（昭和15）年で、戦争のため鉄材の使用が制限された時代を反映しています。現在は県道の一部として使用されています。経済産業省の近代化産業遺産にも認定されました。

待機所はなぜか破損を繰り返す

南側に待機所がありますが、車の衝突で破損しています。ここは、修理しても誰かが必ずぶつけるという逸話があります。また、地元の人からは「眼鏡橋」という呼び名で親しまれています。二股橋の下を流れる小川川はダムのない透明さがあり、すぐ先で合流する奈半利川（ダムで一度水がとまり緑色になる）の水の違いがひと目でわかり、環境を考えるきっかけにもなります。

撮影ポイント

橋たもとの休憩所から見ることができます。秋なら橋と紅葉を狙え、午後なら日当たりが期待できます。

31 旧魚梁瀬森林鉄道施設 小島橋（こしまばし） 北川村

トラス橋とガーダー橋を組み合わせた堂々とした橋の姿。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

国 近代化産業遺産
2009（平成21）年2月　認定

建設年：1932（昭和7）年
構造等：鋼製二連トラス桁及び五連桁橋
橋　長：143.0m
橋台2基及び橋脚6基付、東西擁壁附属

ガイドポイント

橋長は143メートルと最大規模

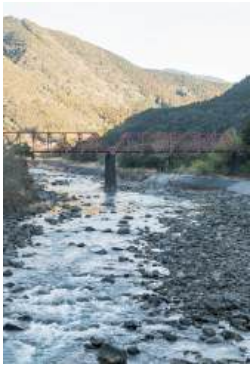
小島橋は奈半利川が川幅を増し、川岸に平地が広がっている場所に架かる単線仕様の鋼製橋梁で、1932（昭和7）年に建造されました。橋長は143.0メートルと中芸地区の森林鉄道では最大の規模です。道幅は約2.0メートルで、橋のほぼ中央の両側に、長さ約2.5メートル×幅約1.2メートルの待機所が設けられています。主径間には下路式二連トラス桁が施され、側径間には上路式五連一形桁が施されています。トラス橋とガーダー橋を組み合わせた堂々とした構えは、遠目からでも見映えがします。
現在、歩行者や軽自動車のみが渡れ、利用されています。経済産業省の近代化産業遺産にも認定されました。

ゆずロードに相応しい場所

奈半利川上流を向き、小島橋から右の村道（旧森林鉄道跡）を小島キャンプ場方面へ進むと、一面のゆず畑があり、ゆずロードに相応しい場所です。さらに奥には「不動さま」と呼ばれる不動の滝があります。また左の国道を進めば、北川村温泉があります。小島橋を中心に散策コースを楽しめます。

撮影ポイント

左岸下流から全容をみられますが、右岸の遊歩道から広角でダイナミックな構図もいいでしょう。山桜がきれいな春がおすすめで、午後の早い時間帯なら日当たりが良好です。



32 旧魚梁瀬森林鉄道施設 立岡二号桟道（たちおかにごうさんどう） 田野町

立岡分岐点から
奈半利貯木場に向かう桟道。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

国 近代化産業遺産
2009（平成21）年2月　認定

建設年：1933（昭和8）年
構造等：鉄筋コンクリート造10連桁橋
橋　長：61.2m
橋台2基及び橋脚9基付、鉄筋コンクリート造単桁橋及び石積擁壁（橋脚1基を含む）附属

ガイドポイント

枕木を固定するフック

1933（昭和8）年に建造されたのが立岡高架・奈半利川鉄橋で、これは立岡分岐点から奈半利貯木場に向かう桟道でした。現在その姿が確認できるのは、立岡分岐より土手状に積まれた盛土上を線路が通り、この途中で農業用道路や田畑を避けるために設けられた、石積高架と10連のコンクリートガーダー橋です。
橋台、橋脚、桁橋で構成され、橋台はコンクリート製重力式橋台です。桁橋の側面には、線路の枕木を固定するための鉄筋のフックが残っています。
これも森林鉄道を代表する遺構のひとつで、経済産業省の近代化産業遺産にも認定されています。

県内最高といわれた技術

立岡二号桟道のゆるやかなカーブに夕日が当たると、シルエットがきれいにできたそうで、かつての森林鉄道も同様だったようです。この高架の先に、奈半利川を渡る三連のトラス橋がありました。

現在は、川岸や川の中に橋台と、2連目までのトラスを載せた橋脚が3基残存するだけです。
当時、高知県内で最高の技術を持って建設された橋だと評判になっていました。

撮影ポイント

午前なら東から、午後は西から撮れば順光ですが、あえて逆光で狙うのもいいでしょう。

33 旧魚梁瀬森林鉄道施設 八幡山跨線橋（はちまんやまこせんきょう） 田野町

八幡宮の氏子・柳井三郎氏が設計したといわれる、参道となった跨線橋。

国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

建設年：1933（昭和8）年
構造等：鉄筋コンクリート造桁橋
橋　長：7.0m
階段及び取付部附属

ガイドポイント

地域の信仰に基づく管理があった

森林鉄道を跨いで八幡宮へ至る参道としてつくられた跨線橋です。鉄筋コンクリート造のガーダー橋で、橋長は7.0メートルで、路面から歩行面上端までの高さは約3.7メートル、橋幅は約2.5メートルです。跨線橋の欄干には「昭和八年四月架設」と刻まれており、1933年のことだとわかります。
設計は氏子だった柳井三郎氏によるものといわれています。使用した鉄筋コンクリートは粒子が粗く、昭和初期らしい構造を呈しています。鳥居から神社に至るまでの参道は、1931（昭和6）年頃から整備され、改修が加えられたようです。
現在も参道として使用され、地元の氏子たちが補修などの取り組みを継承しています。地域の信仰に基づく管理の経緯がわかる場所として貴重です。

八幡宮にある丈六の仏頭

八幡山跨線橋を渡り、八幡宮へはすぐです。この由緒ある神社の本殿の北側の森には「丈六の仏頭」を納めたお堂があります。説明板では仏像の頭の部分、前額部からあご先まで86センチメートルもあるそうです。森林鉄道と同じように、大切な空間が身近にあります。

撮影ポイント

午前中なら東側、午後なら西側から撮ると光線状態が良好です。

34 旧魚梁瀬森林鉄道施設 法恩寺跨線橋（ほうおんじこせんきょう） 奈半利町

切石を布積で積み上げた、馬蹄形断面のアーチ。

国 国指定重要文化財（建造物）
2009（平成21）年6月　指定

建設年：1933（昭和8）年
構造等：石造単アーチ橋
橋　長：3.9m
階段附属

ガイドポイント

線路を越えて参道に

奈半利貯木場の西側、旧街道の北側に位置し、三光院より南の旧街道へ至る跨線橋です。かつては三光院の高台の斜面が、南の旧街道までありましたが、鉄道を通す際にその斜面を切り崩すことになり、線路を越えて新たに参道をつくったものです。立岡～奈半利の開通が1933（昭和8）年であり、この跨線橋も同時期だったと推測できます。
石造アーチ橋で、上部歩行部分の長さは約5.6メートル、路面から歩行面上端までの高さは約4.9メートル、橋幅は約3.1メートルです。切石を布積で積み上げ、馬蹄形断面のアーチを設けています。

アーチ橋として親しまれる

現在は安全のため手すりをつけていますが、構造自体は建設当時の状態が残されていますし、生活道路として利用されている旧軌道にかかる跨線橋として、重要な役割を果たしています。地元では「アーチ橋」の呼び名で親しまれています。

撮影ポイント

東側からがベストアングル。午前中なら光線状態が良好です。

35 支線跡遺構群（しせんあといこうぐん）

中芸全域

本線・支線あわせて総延長300キロメートル以上。

ガイドポイント

探索ツアーなどに活用される

旧魚梁瀬森林鉄道は1911（明治44）年、安田川線（馬路～田野）を皮切りに、魚梁瀬線（馬路～魚梁瀬～石仙）、奈半利川線（奈半利貯木場～釈迦ヶ生）と本線が敷設（ふせつ）されていきますが、その前後に支線も整備されます。

1913（大正2）年に谷山線、1917（大正6）年に宝蔵線（西川線）をはじめ、中川線、東川線など各地域で整備されていき、中芸地域で本線・支線あわせて総延長300キロメートルにも及ぶといわれています。それぞれの支線跡で、コンクリート造りの橋台、木橋、当時のレールや枕木が残る鉄道敷など、林業盛時を偲ばせる遺構群があり、探索ツアーなどに活用されています。

2009（平成21）年には、魚梁瀬の奥地、徳島県境に近い「影地山」で、レールと枕木、ポイント切り替えなど、当時のままの姿で残っている遺構が見つかっています。このように、歴史的遺構は中芸地域に多く点在しているようです。

昭和戦前期路線図

36 旧馬路営林署（きゅうううまじえいりんしょ）

馬路村

森林鉄道時代の営林署の建物として唯一残る遺構としての価値。

ガイドポイント

1954年の営林署が今に残る

馬路営林署は安田川の西岸、川沿いを通る軌道に面してすぐの山側にありました。「高知友林」331号の資料によれば、1891（明治24）年頃に開庁し、その後に改築・増築を重ね、1954（昭和29）年に新築、「洋風木造一部二階建洋瓦葺・建坪68坪、延建坪81坪」となっています。ここに事務所や研修棟、署長室等があり、2002（平成14）年に馬路村農業協同組合の本所となった後も、その様子は残されています。
森林鉄道時代の営林署の建物として唯一残る遺構としての価値と、歴史的建造物の有効活用例といえます。
また、隣接する敷地にあるゆず加工場では、年間を通じて工場見学を受け入れています。

蒸気機関車の汽笛が鳴り響く

この営林署は蒸気機関車の時代、基点といえる場所でした。この営林署近くの谷あいに機関庫があり、機関車がいつも3台、1台は空のトロッコを引いて魚梁瀬にあがり、1台は実車で安田へ下っていき、1台は予備としてあったそうです。
機関車の係は朝3時頃から蒸気をおこすために作業を開始して、それが動き出し汽笛が鳴る音で、村人たちに朝を伝えていたといいます。

ゆずの森加工場

37 野村式機関車（のむらしきき かんしゃ）

馬路村

地域ではガソリン機関車を「ガソ」と呼び、親しんできた。

ガイドポイント

昭和期の森林鉄道で活躍

魚梁瀬森林鉄道の開通当初は、動力を使わずに下り勾配を利用して運材が行われていましたが、1921（大正10）年に蒸気機関車の利用が始まりました。その後、時代とともに、ガソリン車、木炭ガス車、ディーゼル車が導入され、木材の大量輸送に大きく貢献しました。機関車の運転手は花形の職業といわれたそうです。

昭和期に魚梁瀬森林鉄道には、高知市の野村組工作所が製造した機関車が多く導入されました。野村式L69号機関車はガソリン車として製造され、後にディーゼル車に改造された機関車で、昭和30年代に魚梁瀬森林鉄道で使われ、廃止後は魚梁瀬丸山公園で保存されました。ちなみに野村組工作所の創設者である野村茂久馬氏は、「土佐の交通王」と呼ばれた実業家で、奈半利村（現奈半利町）で生まれ、奈半利邸（P53）がありました。

油や鉄サビのにおいも当時の雰囲気

野村式L69号機関車は1989（平成元）年に修復され、魚梁瀬丸山公園で動態保存（機関車などが動く状態で保有）されています。油や鉄サビのにおいなど、当時の雰囲気が残されています。魚梁瀬丸山公園での体験乗車・運転では、復元製造された谷村式機関車が主に使われていますが、イベント時などには野村式L69号機関車も走行します。

38 写真資料Ⅰ　寺田文庫

中芸地域

国有林、山の暮らしを記録した寺田正氏の写真。

馬路村「まかいちょって家」2階ギャラリーより

ガイドポイント

森林鉄道の貴重な記録

1911（明治44）年に国内3番目となる本格的な森林鉄道が開通するなど、中芸地域は林業が盛んでした。山間地区では男性は朝早くから山へ登り、魚梁瀬杉をはじめとする杉を伐り、その跡地への植林、育林に汗を流したのです。海岸地区では木材出荷を主な生業としていました。そして週末になると、それぞれの町へ買い物に出かけ、娯楽を楽しんでいたそうです。

そうした人々の暮らし、仕事を記録したのが、高知営林局に在籍していた寺田正氏です。寺田氏の写真は、国有林の林業経営（伐採・搬出・造林等）や、魚梁瀬杉を運び出す道具としての森林鉄道、働く人たちの様子や生活の営みを記録したもので、当時のことを知る資料としての価値もあります。

高知市民図書館寺田正写真文庫

寺田氏の写真は、「魚梁瀬森林鉄道（RM LIBRARY(29)」（舛本成行著・寺田正写真／出版：ネコパブリッシング）や、「林鉄・寺田正写真集」（出版：寺田正写真集刊行会）などの出版物や、高知市民図書館寺田正写真文庫があります。馬路村「まかいちょって家」の2階ギャラリーでも一部常設展示しています。

馬路村「まかいちょって家」2階ギャラリー

39 写真資料Ⅱ 高知大林区署、高知営林局が撮影した大正～昭和初期の関連写真 中芸地域

国の機関だからこそ、当時の森林鉄道の歴史を残すことができた。

和田山付近

馬路製材所付近

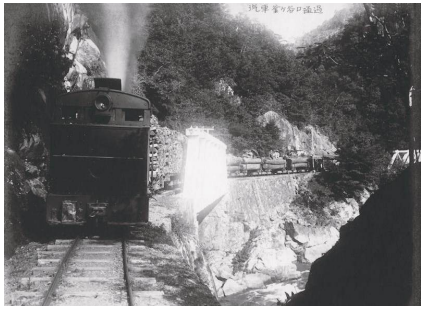
ガイドポイント

林業に活力があった時代

高知営林局（現：林野庁四国森林管理局）は、魚梁瀬森林鉄道創設期の貴重な写真を含む、県内各地の森林鉄道関連の写真群を撮影、保存していました。まだ写真機自体が普及していない時代でありながら、国の機関だからこそ、森林鉄道の記録を今に残すことができたといえます。写真から当時の林業の活力が伝わってきます。

思い出の森林鉄道

これらの写真の一部は現在、林野庁四国森林管理局のウェブサイト中のフォトレポート「思い出の森林鉄道」で閲覧することができます。
現在も県道、町村道として活用されている橋や桟道、今はない製材所、運搬の様子など、伐り出した木を山から運ぶ森林鉄道の様子を見ることができます。



釜ケ谷口通過

奈半利貯木場桟橋

林野庁四国森林管理局
フォトレポート「思い出の森林鉄道」より
https://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/koho/shinnrinntetudou.html

40 岡御殿（おかごてん） 田野町

藩政時代に栄えた田野を今に伝える場所。

県 高知県保護有形文化財（建造物）
2009（平成21年）年4月　指定

建築年：1844（天保15）年
構造等：書院造り

ガイドポイント

上段の間がある格式

土佐藩主山内侯が土佐に入国した際に泉州（現在の大阪）から藩侯に従って田野に来たと伝えられ、材木業や回船業で名を馳せ、林政にもかかわるなど、豪商田野五人衆のひとりと呼ばれる岡家が、領内巡見時の藩主宿泊所として1844（天保15）年に建てたのが岡御殿です。
上段の間は藩主が家臣と対面するための部屋で、身分の違いを表すために一段高くなっています。県内で上段の間が残っている施設は、高知城本丸、竹林寺客殿、旧立川番所院のみです。実際に12代藩主、13代藩主が宿泊したといわれています。

芸術性と実用性を兼ね備える

建築に関しては格式高い書院造が特徴です。岡御殿の室内は、各部屋が襖で仕切られ、用途に応じてスペースの使い分けができていました。襖に描かれた絵や文字、室内から見える中庭の美しさを含め、芸術性と実用性を兼ね備えています。また第一展示室から第三展示室があり、岡家と土佐藩の関わり、建築の特徴や参勤交代の様子、そして岡家に代々伝わる貴重なものを展示しています。

風水御殿

もともと岡御殿の敷地は、現在のものより4倍ぐらい広かったといわれ、小学館で風水の本の出版をしている研究者が足を運ぶと、「ここは風水御殿ではないか」という説を唱えていました。パワースポットという切り口もあるようです。

41 濱川家住宅（はまかわけじゅうたく） 蔵、離れ（桝屋…元金水酒造） 田野町

旧参勤交代道に面する敷地に建つ、土佐漆喰の酒蔵と寄棟造りの離れ。

国登録有形文化財（建造物）
2003（平成15）年12月　登録

蔵　1916（大正5）年　建築
土蔵造二階建、建築面積193㎡

離れ　1919（大正8）年　建築
1932（昭和7）年　移築
木造平屋建、瓦葺、建築面積85㎡

ガイドポイント

土佐漆喰と水切り瓦

濱川家は藩政末期から明治期にかけて回船業や木材業を営み、大正期には酒造業（金水酒造）で栄えました。蔵は、旧参勤交代道に面する敷地の南側に1916（大正5）年に建築された、桁行10間、梁間3間で切り妻造り桟瓦葺きの大きな酒蔵です。外観は、北側に下屋を差し掛け土佐漆喰に水切瓦を数段取り付けて、平側上部と下部に換気窓を設け、台風常襲地域である風土から生まれた土佐の伝統的な蔵の特色を残しています。

大正期の酒屋の住居形式

蔵の北方に南北棟で建つ離れは、桁行4間半、梁間2間半の寄棟屋根の桟瓦葺きで、1919（大正8）年につくられ、以前は別荘として建築されたものを、1932（昭和7）年に母屋として移築したものと伝えられています。寄棟造りに下屋がつく平屋で、入母屋造の玄関を備えています。大正期の住居形式を残すものとして貴重です。

伏流水がうまい酒づくりを助ける

中芸地域の奈半利川や安田川の上流域、北川村や馬路村は村の90%を森林が占めています。降雨量も多く、その山々から下流の大地へと流れくる伏流水は、かなりの軟水で、吟醸造りなどの酒づくりに適しています。近年は有限会社濱川酒造で吟醸酒の「美丈夫」などの名酒も販売されています。

42 南商店　店舗兼主屋、外塀、内塀　安田町

土佐漆喰壁に5段の水切瓦で飾る、地域的な特色を見せている商家建築。

国 国登録有形文化財(建造物)
2007(平成19)年12月　指定

店舗兼主屋　大正後期 建築
木造二階建、瓦葺、建築面積154㎡

外塀　大正後期 建築　コンクリート造
瓦葺、延長6.0m、総高1.8m

内塀　大正後期 建築　コンクリート造、
瓦葺、延長7.0m、総高1.7m

ガイドポイント

交通の要所に建つ商家

旧国道55号と、安田町から馬路村に行く県道12号安田東洋線に交差する東南角地という中心部にあり、林業盛時に繁栄した中芸地域海岸部安田町を代表する大正後期の商家建築です。

「久保屋」の屋号をもつ南商店は、洋服や雑貨を扱い、戦前には銀行の代理店を務めたといわれています。その店舗兼主屋は、2階建の町家の造り。間口5間半(約9.9メートル)の切妻(きりづま)造り、桟瓦葺(さんかわらぶき)で、前後に瓦葺庇(ひさし)がついています。妻壁(つまかべ)は土佐漆喰塗で、5段の水切瓦で飾る意匠は実に美しく、地域的な特色を見せています。

外街路景観のアクセントとなる外塀

西側道路から敷地の南面へ折れ曲がる延長6.0メートルの外塀は、基部は大ぶりの浜石を切込み矧ぎで3段積、壁体はコンクリート造で、蛇腹2段を造り、頂部には桟瓦を葺いています。総高1.8メートルで、街路景観のアクセントとなっています。内塀の壁はヒル石を混ぜたモルタル塗で竪目地を表し、頂部は瓦を葺いています。その丁寧な造りは庭園景観を引き締めています。塀は大正後期につくられています。

11ヵ所29件の登録有形文化財

安田町の中心部には11ヵ所29物件が国の登録有形文化財が集中しており、町歩きやサイクリング散策に魅力的な町です。建物の前には解説板があり、その特徴が説明されています。

43 旧柏原家住宅（きゅうかしわばらけじゅうたく） 主屋及び離れ、表門、東土塀及び西土塀 安田町

2009年に修復・古民家再生し、安田町内外の交流拠点施設になる。

国 国登録有形文化財（建造物）
2012（平成24）年2月　指定

主屋及び離れ　昭和前期 建築
木造平屋建、瓦葺、建築面積167㎡

表門　昭和前期 建築
木造、瓦葺、間口2.0m

東土塀及び西土塀　昭和前期 建築
土塀、瓦葺、総延長17m

ガイドポイント

格子、欄間、大正ガラス

旧柏原家住宅は、大正から昭和初期の土佐東部の建築様式で、入母家造・平屋造・桟瓦葺で、8室からなっています。
上質な意匠をこらした格子組みのガラス戸を開けると、広々とした玄関があり、正面に釣床（つりどこ）があり、武家屋敷を連想させます。中廊下を挟んで南と北に居室を設ける形式は、大正時代に用いられた建築様式です。また、和室と和室の室境の上部には、ケヤキの欄間がはめ込まれて、技巧を凝らしています。
濡れ縁と内縁はガラス戸で仕切られていますが、ガラスには大正ガラスを用いて、中庭の風景がゆらいで見えます。
2010（平成22）年に改修し、一般公開されました。安田町内外の交流拠点施設であり旧柏原家住宅は広く活用されています。

自然石を基礎にして壁面を土佐漆喰

50センチメートル大の自然石を積上げて基礎にして、壁面を土佐漆喰で仕上げた土塀が、表門を挟んで東側5.5メートル、西側11.5メートルに延びています。
門は表門・東門・中門が設けられ、表門はケヤキの1枚板を使用しています。建築当時、「表門だけで家1軒が建つ」と言われたそうです。

44 旧市川医院（きゅういちかわいいん）

安田町

大正モダンな医院建築を玄関正面から感じる。

国 国登録有形文化財（建造物）
2012（平成24）年2月　指定

1913（大正2）年 建築
木造平屋建、瓦葺、建築面積97㎡

ガイドポイント

当時の「投薬口」も残っている

柏原家と親子関係だった市川家。日本家屋だった旧柏原邸と土間でつながっていた旧市川医院は、片廊下式の平面構造で、屋根は正面が寄棟（よせむね）造になっていますが、背面は切妻（きりづま）造の形式で、外壁はガラス窓に下見板張の洋館の意匠が活かされています。

内部はレントゲン室や診察室などを1列に並べる構成で、投薬口部分などの窓は当時のものが使われています。また、天井板などには魚梁瀬の天然木材の良材がふんだんに使用されました。

大正モダンな医院建築の旧市川医院と洗練された和風住宅の旧柏原家住宅が並び、特徴的な景観を形成しています。

安田ゆかりの人物を紹介

2010（平成22）年に改修し、一般公開された旧市川医院と旧柏原家住宅は、「安田町まちなみ交流館・和（なごみ）」として、安田町内外の交流拠点施設になりました。

展示スペースでは、坂本龍馬を人間教育した高松順蔵（龍馬の長女・千鶴の夫）や、同じ海援隊として活躍した高松太郎、石田英吉をはじめとする、安田町出身やこの地に縁のある幕末・明治維新の先人たちを紹介する企画展などを行っています。

45 竹﨑家住宅（高田屋）主屋、離れ、蔵

奈半利町

災害に備えて蔵屋根の一部を二重にした土佐漆喰と水切瓦がついた地域独特の蔵の造り。

国 国登録有形文化財（建造物）
2000（平成12）年10月　指定

主屋　明治初期 建築
木造平屋建、瓦葺、建築面積122㎡

離れ　明治初期 建築
木造平屋建、瓦葺、建築面積25㎡

蔵　明治初期 建築
土蔵造2階建、瓦葺、建築面積39㎡

ガイドポイント

主屋、蔵、離れが指定される

樟脳（防虫剤、防臭剤、医薬などに使用）業で栄え、民権運動の指導者を出すなどした竹﨑家の店舗兼住宅です。1890（明治23）年頃の建築と伝えられます。

平屋建ての主屋の南には庭があり、北側には棟を落とした土間と蔵前をかね、蔵が建てられています。この蔵の外壁は下見板張りで、土佐漆喰に水切瓦がついたもので、中芸地域独特の造りです。蔵の入口は、防犯のため家屋内部にあり、災害に備えて蔵屋根の一部は二重になっています。東側には外から出し入れ可能な旧冷凍庫があり、昔は氷を販売していたので氷小屋とも呼ばれていました。

離れは主屋の東側に建ち、寄棟造、桟瓦葺の木造で、外壁は真壁造、南面は気候風土に配慮して板張りになっています。

ご当主が自ら案内

竹﨑家の蔵は堅牢に築かれた石垣の上に建っています。そこは「蔵資料館」として、河田小龍らの絵画や著名人の書（掛け軸）、竹﨑家に伝わる工芸品や調度品、四代目の音吉が世界的物理学者の寺田寅彦と親友だった縁から、やりとりした手紙や写真が展示され、一般に開放しているので観ることができます。また、タイミングがあえばご当主自らが学芸員として説明してくれます。ここではゆったりと庭をながめながらお茶を飲むこともできます。

46 森家住宅（旧野村茂久馬邸）主屋、蔵、西石塀、南石塀、東石塀

奈半利町

東、南、西の周囲を浜石の練り積みの石塀で囲まれた大きな邸宅。

国 国登録有形文化財（建造物）
2000（平成12）年10月　指定

主屋　大正初期 建築
木造2階建、瓦葺、建築面積218㎡

蔵　明治中期 建築
土蔵造2階建、瓦葺、建築面積50㎡

石塀　大正初期 建築　石造
延長 西6m、南19m、東19m

ガイドポイント

土佐の交通王の私邸

魚梁瀬森林鉄道の機関車を開発した野村組工作所の創設者であり、「土佐の交通王」と呼ばれた実業家・野村茂久馬の奈半利邸として、1918（大正7）年頃に建設されたそうです。
主屋は二階建、入母屋造、桟瓦葺で、和風を基調としながらも道路に面した西面は奈半利でも珍しい下見板張りに、上げ下げ窓の洋風デザインです。ここは、野村茂久馬自身が設計した家として知られています。
二階座敷は南から北に、八畳、十二畳、八畳、十畳と四室が並び、間の襖を取り除けば三十八畳の大広間になります。建築当初はその外側を三尺の畳廊下がぐるりと取り囲んでいました。一階の台所に光を入れる漆喰の天窓や、数寄屋造の厠、硝子入りの障子と引き戸など、それぞれに意匠が凝らされています。
蔵は敷地の北側にあり、明治中期に建設したものと伝えられています。
1946（昭和21）年に金融機関の田野支店奈半利出張所となり、その後、料亭が営まれていた時期もありました。

奈半利の町を彩る石塀

この屋敷の大きな特徴のひとつは、浜石を練り積みした石塀で囲われていることで、西石塀、南石塀、東石塀それぞれ大正初期に建築されています。切石積みの基礎に浜石を練り積みとし、頂部に瓦葺の小屋根を載せています。外見が美しく、耐久性にも優れており、奈半利特有の街路景観を形成しています。東石塀は煉瓦でアーチ状に開口をつくっています。
奈半利町には13ヵ所37物件の登録有形文化財があります。

47 濱田典彌家住宅（はまだのりひろけじゅうたく） 主屋、かま屋、米あずかり場、土蔵、石垣塀

奈半利町

奈半利の名主といわれる住宅の建築様式を楽しむ。

国 国登録有形文化財（建造物）
2004（平成16）年11月　指定

主屋　1934（昭和9）年 建築
木造平屋建、瓦葺、建築面積116㎡

かま屋　1934（昭和9）年 建築
木造平屋建、瓦葺、建築面積67㎡、井戸付

米あずかり場　1934（昭和9）年
木造平屋建、瓦葺、建築面積37㎡

土蔵　明治後期 土蔵造2階建、瓦葺、建築面積62㎡

ガイドポイント

職人たちの高度な技術が見える主屋

濱田家住宅は平成に古い景観を壊さないよう伝統技術に沿った建築様式を用いて修復されました。
この建築当時の濱田家当主は町内に400人の小作人を持つ大地主であり、匠の技が随所に見られる住宅です。1934（昭和9）年に新築された主屋と、明治後期に造られた蔵があり、周囲には川原石などを積み上げた石塀を配しています。
主屋は入母屋造、桟瓦葺で、書院造り様式で造られ、内部は接客、家族の生活、使用人の生活とそれぞれの部分に分けられています。玄関の格天井、長押、床の間、床脇、書院、欄間などたくさんの見どころがあり、丁子（ちょうじ）紋入りの鬼瓦、合掌部にある瑞祥文様の鳳凰の懸魚（げぎょ）（装飾的彫刻）、玄関口の明り取り部分には、横の桟が一本もない筬（おさ）組子に麻の葉柄が組み込まれたものなど、高度な技術や細工が多く見られることも特徴のひとつです。

漆喰をかまぼこ形に盛り上げた海鼠（なまこ）壁

蔵の妻面には、方形の平瓦を貼り付け、その目地に漆喰をかまぼこ形に盛り上げた海鼠（なまこ）壁があります。上にある水切瓦の横のラインを際立たせる幾何学的な文様で、土佐の美しい伝統様式です。また、石垣は地震の際にもずれることの少ない切り込み接ぎの一種で、亀の甲羅に見える亀甲（きっこう）積みは大きな蔵の壁面に変化をつけています。蔵入口の上部にある漆喰彫刻は、鏝絵（こてえ）などと並ぶ左官の手技の見せ所です。

48 星神社のお弓祭り

北川村

オモ、タニの2組に分かれた射手が1008筋の矢を放つ悪魔退治の修法。

県 高知県保護無形民俗文化財
1964(昭和39)年6月　指定
西暦奇数年の1月8日
北川村木積　星神社

ガイドポイント

西暦奇数年の1月8日、木積の星神社にて

お弓祭りは、薬師如来十二神将によるもので、悪魔退治の修法と伝えています。北川村にある木積・和田・島地区の星神社で持ち回りに行われていましたが、1879(明治12)年より木積・和田地区の交互になり、やがて木積のお弓祭りだけが西暦奇数年(隔年)で行われています。それぞれの3地区から選出された射手(氏子)は12人です。1月1日に神事を行い、2日から練習を開始し、1月8日の祭り当日は境内で早朝から夕暮れにかけて行われます。

神仏習合時代の面影を今に伝える

射手12人は、オモ、タニの2組に分かれ、三度弓、神頭(しんどう)・雁股の矢、初的の儀礼弓に続き、1008筋の矢を放っていきます。射手は花形であるものの、弓を引き続けるという過酷さもあります。そしてナマヤ、割り膝、投げ出し、毘沙門の的の儀礼弓をもって終わります。

時代と共に地域の人口が減っていくなかで、これまで続けられてきたのは、「自分たちの時代はお弓祭りを存続させよう」という各地域のお世話係の存在が大きいようです。また、弓に神仏を宿らせる弦掛(つるか)けの儀では神職と僧侶がこれを行い、毘沙門の的では僧侶が祈念するなど神仏習合時代の面影を今に伝えています。境内に接して金法寺があるところから、“金法寺の弓祭り”ともいわれています。

主な参考文献：高知県中芸地区森林鉄道遺産調査報告書（中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会）
魚梁瀬森林鉄道遺産 Web ミュージアム（中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会）
文化遺産オンライン（文化庁）

発　行：中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会　　発行日：2025 年 12 月